

第 12 号

● 目 次 ●

平成 13 年を振り返って	1
萬華鏡：ダグール族	2
Area Report [SIGNAL] : 「ロシア」「モンゴル」「中国」	3.4
日本館だより	4
東北アジア研究センター開設 5 周年記念行事について	5
東北アジア研究センター日本館とロシア科学アカデミー・シベリア支部の鉱物学・岩石学・地質研究所との合同研究会	6
最近の共同研究会から	6.7
センター動向	7
活動風景	8

平成 13 年を振り返って

東北アジア研究センター長 山田 勝芳



年の瀬に当り、平成 13 年を振り返ってみて、本センターの足固めの時期を終え、新たなステージに踏み出したということ強く感じております。

10 月 1 日の本センター開設 5 周年記念行事がその大きな節目でした。阿部博之東北大学総長・西澤潤一岩手県立大学長（前東北大学総長）以下、多数のご来賓並びに参会者のご出席をえて、盛会のうちに終えることができました。当日、ご参加の皆様からは暖かな激励の言葉をいただくとともに、今後への一層の努力も要請されました。

やや遅すぎた感はありますが、開設 5 年目、完成実質 4 年目で本センターの「自己評価報告書」を公表しました。また現在外部評価も進められており、平成 14 年 3 月に公表の予定です。東北大学全体でも各種評価が重要となっていて、それらにも本センターの研究・教育活動を報告しております。

本センターは、この新たなステージで一層の奮起が求められています。しかも、「主観的な努力」だけではだめであり、目標・計画に対する「客観的な達成」が求められています。したがって、組織運営の透明性を高めつつ、客観的な自己評価システムを構築していくことが大切です。そのためにはスタッフ個々人のレベルアップと、組織としての力量増大がなによりも必要です。本センターがエリアとする東北アジアに関して、いかなる学術的寄与をしていくか、社会的貢献をさらに進めるにはどうしたらよいか、それらについても真剣に検討していかねばなりません。

このような課題を考える上で、大きな示唆を与えられたのが、12 月 1 日のセンター公開講演会での和田春樹先生（東京大学名誉教授・本センター客員教授）のご講演でし

た。なぜ「東北アジア」という地域設定であるべきなのか、そこでの 21 世紀の課題は何か、について明快な回答と指針が示されました。本センターの対象地域の現代的・将来的問題について本質的なところから考えさせられるとともに、センターの歩む方向性について意を強くすることができました。このご講演では地域設定として、アラスカとともにハワイまで含めて考えるべきことが指摘されました。このご指摘に、12 月 14 日にロシア科学アカデミー会員 N. N. ボルホヴィティノフ先生（世界史研究所・北米センター長）がご講演された毛皮採取を中心としてアラスカ経営に当たっていた露米会社の活動範囲を重ね合わせると、地域がぴったりと合致し、実に興味深いものとなります。このことは、東北アジアの地域形成自体を深く掘り下げることで、政治・経済・国際関係及び自然・環境などを含めた現代的・将来的諸問題がより明確化するということを、明らかにしているのではないのでしょうか。これが激動する世界の中で東北アジアを考える基礎となります。要するに、「ラディカル」に考察することが新たな地平を切り開くことを可能にするのです。

平成 14 年・2002 年は、国立大学が法人化に向けて具体的な作業手順に入る年になります。当然本センターもこの大波の中で進路模索をしなければなりません。きっちりとした自己点検・自己評価を踏まえた目標・計画をどのように出してゆけるのか、いかにして研究体制を一層強化できるか等々、正念場を迎えた感がします。これらのことを銘記し、1 年を振りかえり、新年への心構えとしたいと思います。

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから 米国テロとロシア経済

1999年にプーチン大統領が就任してから、ロシア経済は好調に転じた。1999年のGDP成長率は5.4%であり、2000年には8.3%であった。すでに2001年度の上半期でロシアのGDP成長率は5%を記録しており、欧米や日本の経済が減速する中で、ロシアの経済成長率は世界的に見ても顕著である。英国経済紙「フィナンシャル・タイムズ」(2001年10月30日)は社説で「ロシア経済の復活」を論じた。すでにロシアの外貨準備高は340億ドルとなり、タイ(319億ドル)やマレーシア(254億ドル)を抜いている。この経済成長に最も貢献しているのがロシアの石油関連輸出である。

ロシアは資源大国であり、サウジアラビアに次ぐ世界第二位の石油生産国である。1999年以後自国の特性を活かし資源輸出額を高めている。現在、石油関連と天然ガスの輸出を合計すれば、ロシアの輸出額全体の半分を占めることになる。石油関連輸出だけでも四分の一を占める。この石油の75%以上、また天然ガスの90%以上がシベリアで生産されている。つまり、シベリアの資源がロシアの経済成長を牽引しているといっても過言ではない。

ところが、最近ロシア経済の成長に支障となる事態が生じた。それは昨年9月11日に起こった米国テロである。このテロ行為に

より、世界経済が一時的にせよ停滞局面に入り、石油に対する需要が減少した。このため国際石油価格が急速に下降してしまった。ロシアにとって重要な外貨取得源が危機的な



クリスマスの街角

状況にさらされている。これに対処するためロシアとOPECは石油の減産を通じて供給を減らし、それにより国際石油価格を安定させようとしている。しかし、今年前半は国際石油価格の低迷により、ロシアの経済成長が減速することは確実と思われる。ロシア経済が本格的に復活するのは、資源依存の経済成長パターンからシフトする時であろう。

(塩谷昌史)

モンゴルから 内モンゴルの早魃災害

最近、モンゴルの砂漠化、環境破壊が注目を集めている。内モンゴル地域では、ここ100年間中国内地から流入した大量の移民による開墾や伐採が、草原そのものに大きなダメージを与えている。こうした自然破壊や生態学的均衡の喪失が早魃や雪害をひき起こす主な原因となっているのである。

2001年夏、内モンゴルはシリングル草原を中心に、ここ100年ない早魃に見舞われた。北京の「晨报」によれば、内モンゴル自治区草原の90%が早魃に遭い、3200万頭の家畜が被災し、内60万頭が餓死した。家畜だけではなく、ソニト左旗とソニト右旗では野生のシカも多数餓死している。

今年3月中旬から5月中旬までの雨量は平年の5分の1のわずか10mmで、平均気温は平年を2~3度上回るという異常気象が続いた。4月に入っても雨がなく、1ヶ月以上強風と黄砂に見舞われた。ひどい場合は、夏が過ぎても緑の草ばかりか、枯れた草さえ残っていない地方もある。その一方で、いくつかの地域では蝗虫の災害が起き、飢えた家畜が、やむを得ずこれらの蝗虫を食べてしま

うケースもみられた。餓死したある家畜の腹から一匹の鼠と10数匹の蝗虫が見つかったそうだ。餓えが限界に達した家畜が互いの毛を食べることはよくあるが、動物や虫を食べるのは珍しい。早魃に見舞われた遊牧民たちの中には、家畜を売る人が後を絶たない。ある遊牧民が家畜を全部売って最後は自殺した、という悲しいニュースも耳にした。

このような早魃は決して偶然に起きたものでなく、地球全体あるいは中国全土における開墾、伐採などによる人為的な自然破壊とそれに並行する地球温暖化に起因するものと見られる。2年連続、内モンゴルの黄砂が北京で観測されたことで、中国政府はやっと内モンゴルの厳しい現実を目を向けはじめた。中国農業科学院畜牧院の연구원李敏氏は生態破壊がその主因であると指摘している。中国では今後も辺境地帯の開発が続くと思われるが、その成果と結果の真否が問われる時期が来ている。

(オ・フレルバートル)

中国から 中国の国民体育大会

本センターの所在地である宮城県を会場とした今世紀最初の国体は大成功を収めた。2000年大会以降国体も二巡目に入ったが、地元出身地の選手やチームの活躍を見るのは、やはり心躍るものである。さて、隣国中国にも日本の国体に相当する国民的体育行事があるのをご存知であろうか。「中華人民共和国全国運動会」と呼ばれるこの体育大会は、今年は11月11日から約二週間の日程で、広州市を中心に広東省各地を会場として盛大に開かれた。第1回大会は大躍進運動のさなかの1959年に、北京市を会場として開かれた。開催の目的は第一に体育活動を通して国民の団結を図ることにあったが、同時に東西冷戦期にあってオリンピックへの参加資格を持たなかった中国が、スポーツ分野での優秀さをアピールすることも重要であった。実際この大会では当時の世界記録や五

輪優勝記録を上回る成績を収めたことが国内メディアで大々的に報道された。面白いことに、当時の競技種目の中には中国将棋や囲碁なども含まれていた。また人民解放軍選手団が圧倒的成績を収めていたというのも当時の状況を反映している。その後文化大革命などで断続的であったが、第三回以降は一度だけの例外を除き、ほぼ四年の間隔で開催されるようになり、内容的にもオリンピック競技種目に準じる形に整備され、「国内オリンピック」の



中国国体のマスコット
・ウェイウェイ

観を呈している。今回の広州大会は第九回目に当たる。全国の各省・自治区・直轄市のほか、解放軍や鉄道、建設、金融部門等からも選手団が派遣され、さらに今回は中国に返還された香港・アモイ代表団も参加した。四年に一度の全国的イベントと言うこともあり、中国でも連日選手たちの活躍が報道され、開催地広東省が総金メダル数約410枚のうち、70枚近くを獲得し、二位である遼寧省の41枚を大きく引き離れた。とはいえ最も競技で活躍するのはやはりオリンピック代表候補の選手たちである。彼らにとっ

てここでの活躍が2004年のアテネ大会への切符獲得に繋がるのである。しかしその一方、今回の大会では薬物使用の発覚による選手の処分という不祥事も起きており、国際的な競技大会で何かと薬物使用疑惑が取り沙汰される中国としては、国内での意識改革が急務である。ちなみに次回の全国運動会は2005年に江蘇省で開催される予定である。2008年の北京五輪開催へのプレイベントとして、今回以上の盛り上がりを見せるに違いない。

(上野稔弘)

日本館便り

nihonkan-dayori

ノボシビルスク国立大学における 考古学・民族学教育

師走も終わりに近づく昨今、ロシアのノボシビルスク市では新年をむかえる準備が着々と進んでいる。街の広告看板には「新年おめでとう」版があふれ、テレビやラジオを聴けば、あと〇〇日で新年！もうすぐクリスマス！といった声が響いてくる。日本の街では、12月25日を境にしてクリスマスの装飾がとかれ、急にお正月を迎える準備がはじまる。ロシアというよりキリスト教圏では、日本のようにクリスマスとお正月が明確に区切られて祝されることはない。こちらの人々にとっても新年といえば、クリスマス・恋人(!)・樅の木・サンタクロース（ロシアでは「Ded Moroz」文字通りに訳すと「寒さの爺さん」）などという言葉によって象徴されるものなのである。クリスマスと正月は一続きの時間であり、例えば街の広場に建てられたクリスマスツリーは1月1日をすぎてもそのままである。12月にはいると、お店の中や研究所や大学のなかにもクリスマスツリーが飾られるようになり、中旬を過ぎると市場でも樅の木が売られるようになった。



ノボシビルスク国立大学

さて今回の日本館だよりでは、ノボシビルスク国立大学（以下、ノボ大）の人文学部（Gumanitarnyj Fakul'tet）考古学民族学学科（Kafedra arkheologii i etnografii）を紹介したいと思う。私が知り合った何人かの大学人がいうところでは、この大学はロシアのなかでビッグ3に入るらしい。残りの二つはモスクワ国立大学とサンクト・ペテルブルク国立大学である。このなかでノボ大は1959年9月に正式に発足した新しい大学である。注意したいのはノボ大がノボシビルスク市内にあるわけではなく、近郊のアカデムゴロドク（学園都市）という街に位置していることだ。1958年ソ連科学アカデミーシベリア支部が創設されたが、そのときに研究所や大学が集中する学園都市が建設されたのである。

ノボ大は当初理工系学部を中心としてはじまったが、1962年人文学部が創設された。人文学部の初代学部長はA.P.オクラドニコフ歴史学博士であった。彼はすでに故人だが考古学者としては世界的に有名で、その著作は日本語にも多数翻訳

されている。人文学部は当初 ①歴史学・考古学 ②シベリア諸民族の言語と民俗学 ③比較歴史言語学とロシア語学の三本柱のもとに教育を行い始めた。その後さまざまな学科の変遷がおこなわれ、考古学民族学学科は1992年に世界史学科から独立して設立された。考古学民族学学科という組織は新しいものの、人文学部設立当初から教育研究の結果、これまで150人もの考古学者及び民族学者を輩出してきたという。彼らの多くはノボシビルスク大学及びシベリア・ロシア極東地域等の他の大学・研究機関に就職している。

考古学民族学学科が新たにつくられた目的は、北アジア・中央アジア・そして中国・韓国朝鮮・日本を含む東アジアの考古学およびシベリア民族学における専門家を養成することにある。初代学科長はロシア科学アカデミー正会員のV.I.モロージン歴史学博士で、現在は歴史学博士Yu.S.フジャーコフ教授がその任にある。専任スタッフは助手も含めて12人の考古学者・民族学者がつとめており、そのほか同じ学園都市内にある考古学民族学研究所（Institute of Archaeology and Ethnography of Siberian Branch of RAS）などから非常勤講師が招かれている。

学生はこの学科で考古学・民族学・東洋学を学ぶことができる。開講されているのは、考古学原論、民族学原論、先史社会の歴史、古代文明史、遊牧民の歴史、アジア・アフリカ史、中国史学史及び史料学、ロシアにおける東洋学史、中国文学史、中国・韓国朝鮮・日本文化史、東洋思想史、中国語、日本語、韓国朝鮮語である。また先述した考古学民族学研究所との協力の下、考古学実習も行われている。近年開講された特殊講義を

紹介すると、この学科の特色が見えてくるのでやや長くなるが紹介しよう。「旧石器時代とヨーロッパ乾燥地帯」「考古学におけるゴート人の諸問題」「中央アジア考古学の諸問題」「南シベリア考古学」「極東考古学」「シベリア中世考古学」「極東の中世」「中央アジア遊牧民と軍事」「エニセイ川のキルギス人」「中世における南シベリア・中央アジア遊牧民の芸術」「ミッレルの研究におけるシベリア諸民族の考古学および民族学資料」「シベリアの歴史地理」「中国地理」「コロンブス以前のアメリカ史」「中国の民俗」「日本文化」「東洋における軍事工芸」「日本語における文法的同義語研究」等々。こうしてみると、南シベリアと中央アジアの考古学教育に特色があるようにおもわれる。さらに関心のある方は以下のURLを見られたい。http://gf.nsu.ru/kaf/kaie.shtml

(2001年12月22日記、高倉浩樹)

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから 米国テロとロシア経済

1999年にプーチン大統領が就任してから、ロシア経済は好調に転じた。1999年のGDP成長率は5.4%であり、2000年には8.3%であった。すでに2001年度の上半期でロシアのGDP成長率は5%を記録しており、欧米や日本の経済が減速する中で、ロシアの経済成長率は世界的に見ても顕著である。英国経済紙『フィナンシャル・タイムズ』（2001年10月30日）は社説で「ロシア経済の復活」を論じた。すでにロシアの外貨準備高は340億ドルとなり、タイ（319億ドル）やマレーシア（254億ドル）を抜いている。この経済成長に最も貢献しているのがロシアの石油関連輸出である。

ロシアは資源大国であり、サウジアラビアに次ぐ世界第二位の石油生産国である。1999年以後自国の特性を活かし資源輸出額を高めている。現在、石油関連と天然ガスの輸出を合計すれば、ロシアの輸出額全体の半分を占めることになる。石油関連輸出だけでも四分の一を占める。この石油の75%以上、また天然ガスの90%以上がシベリアで生産されている。つまり、シベリアの資源がロシアの経済成長を牽引しているといっても過言ではない。

ところが、最近ロシア経済の成長に支障となる事態が生じた。それは昨年9月11日に起こった米国テロである。このテロ行為に

より、世界経済が一時的にせよ停滞局面に入り、石油に対する需要が減少した。このため国際石油価格が急速に下降してしまった。ロシアにとって重要な外貨取得源が危機的な

状況にさらされている。これに対処するためロシアとOPECは石油の減産を通じて供給を減らし、それにより国際石油価格を安定させようとしている。しかし、今年前半は国際石油価格の低迷により、ロシアの経済成長が減速することは確実と思われる。ロシア経済が本格的に復活するのは、資源依存の経済成長パターンからシフトする時であろう。

(塩谷昌史)



クリスマスの街角

モンゴルから 内モンゴルの旱魃災害

最近、モンゴルの砂漠化、環境破壊が注目を集めている。内モンゴル地域では、ここ100年間中国内地から流入した大量の移民による開墾や伐採が、草原そのものに大きなダメージを与えている。こうした自然破壊や生態学的均衡の喪失が旱魃や雪害をひき起こす主な原因となっているのである。

2001年夏、内モンゴルはシリングル草原を中心に、ここ100年がない旱魃に見舞われた。北京の『晨报』によれば、内モンゴル自治区草原の90%が旱魃に遭い、3200万頭の家畜が被災し、内60万頭が餓死した。家畜だけではなく、ソニト左旗とソニト右旗では野生のシカも多数餓死している。

今年3月中旬から5月中旬までの雨量は平年の5分の1のわずか10mmで、平均気温は平年を2~3度上回るという異常気象が続いた。4月に入っても雨がなく、1ヶ月以上強風と黄砂に見舞われた。ひどい場合は、夏が過ぎても緑の草ばかりか、枯れた草さえ残っていない地方もある。その一方で、いくつかの地域では蝗虫の災害が起き、飢えた家畜が、やむを得ずこれらの蝗虫を食べてしま

うケースもみられた。餓死したある家畜の腹から一匹の鼠と10数匹の蝗虫が見つかったそうだ。餓えが限界に達した家畜が互いの毛を食べることはよくあるが、動物や虫を食べるのは珍しい。旱魃に見舞われた遊牧民たちの中には、家畜を売る人が後を絶たない。ある遊牧民が家畜を全部売って最後は自殺した、という悲しいニュースも耳にした。

このような旱魃は決して偶然に起きたものでなく、地球全体あるいは中国全土における開墾、伐採などによる人為的な自然破壊とそれに並行する地球温暖化に起因するものと見られる。2年連続、内モンゴルの黄砂が北京で観測されたことで、中国政府はやっと内モンゴルの厳しい現実を目を向けはじめた。中国農業科学院畜牧院の研究員李敏氏は生態破壊がその主因であると指摘している。中国では今後も辺境地帯の開発が続くと思われるが、その成果と結果の真否が問われる時期が来ている。

(オ・フレルバートル)

中国から 中国の国民体育大会

本センターの所在地である宮城県を会場とした今世紀最初の国体は大成功を収めた。2000年大会以降国体も二巡目に入ったが、地元出身地の選手やチームの活躍を見るのは、やはり心躍るものである。さて、隣国中国にも日本の国体に相当する国民的体育行事があるのをご存知であろうか。「中華人民共和国全国運動会」と呼ばれるこの体育大会は、今年は11月11日から約二週間の日程で、広州市を中心に広東省各地を会場として盛大に開かれた。第1回大会は大躍進運動のさなかの1959年に、北京市を会場として開かれた。開催の目的は第一に体育活動を通して国民の団結を図ることだったが、同時に東西冷戦期にあってオリンピックへの参加資格を持たなかった中国が、スポーツ分野での優秀さをアピールすることも重要であった。実際この大会では当時の世界記録や五

輪優勝記録を上回る成績を収めたことが国内メディアで大々的に報道された。面白いことに、当時の競技種目の中には中国将棋や囲碁なども含まれていた。また人民解放軍選手団が圧倒的成績を収めていたというのも当時の状況を反映している。その後文化大革命などで断続的であったが、第三回以降は一度だけの例外を除き、ほぼ四年の間隔で開催されるようになり、内容的にもオリンピック競技種目に準じる形に整備され、「国内オリンピック」の

中国国体のマスコット
・ウェイウェイ

**東北アジア研究センター日本館と
ロシア科学アカデミー・シベリア支部の
鉱物学・岩石学・地質学研究所との合同研究会**

東北アジア研究センター助教授
北風 嵐

2001年11月22日、東北アジア研究センターの日本館とロシア科学アカデミー・シベリア支部の鉱物学・岩石学・地質学研究所との合同研究会が上記研究所のメインビルディングの講演会場で行なわれた。講演題目は「北東アジア地域の超塩基性岩とこれに関係する鉱石鉱物」とかなり専門的であったが、主として約40人の上記研究所の研究者が集まり成功裏に終了した。

研究会は同研究所のドブレツォフ所長の司会で始まり、主として筆者が今まで遂行してきた主な硫化鉱物系の合成実験結果、マントル起源の超塩基性岩中に見られるCu-Fe-Ni-S系鉱物の産状、化学組成及びその生成環境などについて約40分英語での講演を行い、その後上記研究所の3人の研究員がこれらに関する硫化鉱物の合成実験結果、マントルゼノリス中の超塩基性岩特徴などに関するパネル講演を各人約10分間行なった。その後総合討論に入ったが、上記研究所にはこ



鉱物学・岩石学・地質学研究所のメイン・ビルディング

のような研究をしている研究者が多数おり、質問の殆どは筆者に集中し、その討論は約50分にも及んだ。時にはロシア語での質問もあり、ユリー・リタソフ博士に通訳して頂き、無事成功裏に終了した。これも上記研究所のドブレツォフ所長とユリー・リタソフ博士及び無機化学研究所の協力の賜物と感謝している。

この研究会は研究交流として成功であったと確信しており、今後もこのような研究交流を積極的に行う必要を感じた。上記研究所ではシベリア地域における地球科学の広範囲の問題が地質学、岩石学、鉱物学および地球物理学の研究部門によって研究されている。関連する4つの研究部門が、シベリア地域の一般的な地質学、金属鉱床学、非金属鉱床学、石油およびガス地質学に関する研究、地球物理学、鉱物学および記載岩石学の研究に従事している。



講演中の筆者

● 最近の共同研究会から ●

◆ 2001年11月10日（土）の14:00～16:00に共同研究「東北アジアにおける民族の跨境生態史」の第2回研究集会が開かれ、姜龍範・中国延辺大学教授の講演「中国朝鮮族と南北統一に果たすその役割」が行われた。



姜龍範氏の講演

◆ センター公開講演会の前日11月30日（金）の15:00～18:00、講演会講師である和田春樹客員教授のほか同じく客員教授である江夏由樹氏（一橋大学経済学研究科教授）、また法学研究科助教授の南基正氏を迎えて公開研究会「東北アジア地域史の諸問題」が行われた。上記3氏の他センターから平川新教授、上野稔弘助教授、岡洋樹助教授、寺山恭輔助教授、伊賀上菜穂講師が参加して各自専門領域の諸問題に関して報告をし、その後全員が参加しての討議を行った。



報告する江夏客員教授



会場風景

◆ 12月4日(火)の14:40～16:10、三重県をはじめ全国各地の地方自治体の行政経営改革に携わっている石原俊彦・関西学院大学産業研究所教授を迎えて特別講義「地方自治体改革と公会計の役割」が行われた。

◆ 12月12日(水)の13:30より共同研究「西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究」の研究会があり、以下の報告が行われた。

1. N. Yurlova, and E. Zuykova (Inst. Animal Systematic & Ecol., SB RAS)

“The Chany Lake”

2. 鹿野秀一・土居秀幸(東北アジア研究センター)

「平成13年度チャニー湖の現地調査結果について」



(左から) Yurlova, Moshkin, Zuykovaの各氏

◆ 12月14日(金)の15:00～18:00に公開講演会があり、ロシア科学アカデミー世界史研究所・北米センター長でアカデミー会員であるN. N. ボルホヴィティノフ氏の講演「ロシア領アメリカ(アラスカ)の歴史と露米会社の活動(1799-1867)―日露交流史の視点から―」が行われた。

(柳田賢二)

センター動向

■ 寄付研究部門

昨年1月1日より次の寄付研究部門が設置されました。

【環境技術移転(NKIK)寄付研究部門】

- 渡邊 之(ワタナベ、イタル) 教授：環境技術(昨年1月着任)
- 魁叶(スエー) 助手：環境政策(昨年4月着任)

■ 現在の客員研究者

本年1月～3月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹(ワダ、ハルキ) 教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹(エナツ、ヨシキ) 教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三(ヨコヤマ、リュウゾウ) 教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- 恩和巴図(エンフバト) 教授：中国、内蒙古大学蒙古語文研究所教授、ダグ語の口語および文献資料の言語学的研究
- BADARCH Dendeviin (バダルチ、デンデヴィン) 教授、モンゴ

ル、モンゴル科学技術大学・学長、言語を主体とする情報工学の教育とその実践

- OKRUGIN Victor M. (オクルギン、ビクトル、M.) 教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・極東支部火山学研究所主任研究員、東北アジア地域の多金属鉱床の生成環境に関する研究
- 鄭永振(テイ、エイシン) 教授：中国、延辺大学教授・渤海史研究所長、ツングース系諸族の興亡とその文明～渤海を中心に～

<客員研究員>

- 呼日勒巴特爾(フレルバートル) 研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
- BORONOEVA, Darima Tsybikovna (ボロノエヴァ、ダリマ、ツイビコヴァ) 研究員、ロシア、ロシア国立プリアート大学文化学部主任教官、日本におけるモンゴル系民族コミュニティに関する研究
- LITASOV, Konstantin D. (リタソフ、コンスタンチン、D.) 研究員：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部地質学地球物理学鉱物学総合研究所研究員、マントル組成十水系の高温高压下での実験
- POPOVA, Liudmila (ポポヴァ、リュドミラ) 研究員：ロシア、サンクト・ペテルブルク大学経済学部講師、北東アジア地域の経済協力について

(塩谷昌史)

活動風景

東北大学東北アジア研究センター公開講演会「東北アジアの共生とユートピア」

本センターの対外学術交流の一環として毎年恒例となった公開講演会が、今年度は12月1日に宮城県民会館6階大会議室にて開催された。今回の講演会は全体テーマを「東北アジアの共生とユートピア」とし、東京大学名誉教授で本センターの客員教授でもある和田春樹氏を講演者に招いて行われた。

本講演会テーマの主眼は、東北アジア地域において古くは中国の「太平」思想などに始まり、近代以降では共産主義のような様々なユートピア観が人々の意識に多大な影響を与えてきた点をふまえ、ソ連崩壊後10年を経て各地域が独自性を発揮する中で、いま改めてこの地域のユートピア観を探ることで、東北アジア地域での「共生」への道を考えることにある。

講演会は本センターの瀬川教授の司会で進められ、まず山田センター長より「中国のユートピアと近代」と題し、中国の前近代と近代のユートピア観のあり方が紹介され、伝統的ユートピア思想の系譜が近代以降の中国の政治思想に受け継がれ、また大きな影響を与えていることが示された。

続いて和田氏より「東北アジア共同の家—新しいユートピアの試みとして」と題して、日本・韓国・北朝鮮・中国・ロシア・モンゴルにアメリカ及び島嶼部を加えた東北アジア地域における共同体の構想とその可能性についての講演が行われた。



会場風景

和田氏は、ヨーロッパや東南アジアが同質性を持つのは対照的に、東北アジア地域は多様性と異質性が顕著である

が、環境保護、経済発展、安全保障といった共通の課題について、政府やNGO、専門家といった様々な側面を通じて協議を行うことが可能であり、ひいては人権



講演する和田客員教授

や民主主義といった課題の解決も可能であるとする。「東北アジア共同の家」の実現には幾多の困難が存在するが、それゆえにそれは現実打破の改革路線であると同時にユートピアであるという。社会主義はユートピアを批判の原理から実践の原理に変えた点で歴史的意義を持つものの、高コストと犠牲の強要という負の側面を持っていたが、世界経済やグローバリゼーションの時代では、開放的で強制的要素のないユートピアが求められており、「東北アジア共同の家」はそうした新しいユートピアを具現化したものとされる。

和田氏はまた、戦後日本は地域主義を否定し、日米を基軸とする二国間関係で対外関係を処理するようになったために、中国や韓国、北朝鮮とは対照的に、自らの所属する地域に対する認識が欠如していること、また「東北アジア共同の家」では、地理的位置づけや他国におけるディアスポラの存在から、韓国が重要な役割を持っていることなど、興味深い指摘を行った。

公演後の質疑応答では会場の参加者との間で活発な議論が行われた。なお、和田氏の講演録については、「東北アジア研究センターアラカルト」として刊行される予定である。

(上野稔弘)

編集後記

公開講演会での和田客員教授の、「東北アジア共同の家」を実現することを困難にしている要因の一つとして日本がこの地域で信頼されていないことが挙げられるというお話は印象的でした。今年はいよいよ日韓共催のワールドカップが開かれます。これが、東北アジアにおける日本への信頼醸成の確実なステップとなることを念じてやみません。

(柳田賢二)